

教育実習をおえて

(社会) 浜 岡 正

教育実習を終えて1カ月が過ぎた。苦しくもあり、厳しくもあった2週間にわたる教育実習であった。教員採用試験の問題集のページを閉じて枕にかえれば、その時の苦労も、心地よい思い出となってくる。

教壇にたち生徒たちの顔を真正面にして、まともな授業ができるのだろうか。そんな不安と焦燥の間を右往左往しているうちに、教育実習が始まった。

はじめて指導案というものを作りながら、ここまで来たらいつもの最後の手段、開き直ししかない。そう自分を慰さめることで、最初の授業を行った。その授業が、どんなものだったかは、はっきりと覚えていない。たぶん、顔の筋肉をひきつけながら、言葉に迷ってばかりで、どうにもみっともない授業だったのではなかったか。その日の天気がとってもよかったことだけは、はっきり覚えている。

反省会は、指導教官から、諸々の反省や注意すべき点を指摘されたが、最初としては良かったですよと言われて、まずは一安心。

宿に帰ってからは、生まれて初めて教壇にたつて授業をやったという、奇妙な感動に酔いしれながら、重々しい疲労感におそわれた。しかし、その日も十分に睡眠をとることができなかった。というのも、明後日に次の授業があり、その晩も指導案作りに精をださなければならなかったからだ。このように、2週間に合計7回の授業を受け持つことで、1日に5時間以上の睡眠のとれた日は数日しかなかったと覚えている。

わざわざ福山までやって来て、かくも悲惨な目にあわなければならない自分に、直接には教育実習に対して、様々な不満や懷疑が沸き起ってくる。自分はいったい何をしているんだ。そんな宙ぶらりんな精神状態で数日が過ぎていった。

「先生、どうして教師になるん？」授業の後にやって来た生徒から尋ねられたのは、ちょうどそ

んな時だった。そこで、前もって教育実習のガイダンスで教えられていたように、信念をもって答えた。「教師という仕事が好きだし、自分にむいているから。」国語の解答のようにおきまりの返答をしたが、自分自身に納得のゆく説明ではなかったような気がした。

授業の行う回数を重ねていくにつれて、ある程度客観的に自分の授業を反省できるようになった。そのころ、生徒から「今日の先生の授業、よかったよ」という言葉を聞いて、教師という職業のすばらしさがわかったような気がした。それを一言でいえば、教師は生きた人間を対象とした創造の魅力があるということだろう。また、自分だけで授業をやっているのだという誤解が、教壇にたつことの重圧になっていたこともわかった。それからは、授業の中で生徒の自発的な意見を求めたり、社会矛盾についての討議の時間を設けたりして、教壇にたつことが楽しみになっていった。

指導教官の適切なアドバイス、忌憚のない批評も、一つ一つが自分の授業の拙さを知るうえで役立ったし、授業以外の雑談も楽しく伺うことができた。また、同じ地理の教生とも、お互いの授業の指導案について意見を交換したり、激励し合ったりして、生徒、指導教官、教生を含めて、広く触れあいの機会をもつことができたことも、教育実習での大きな収穫になった。

教育実習を終えて福山を後にする気持には、解放感と安堵感の入り混った溜息をついてからは、一握の淋しさが波うっていた。広島への帰途で、友人たちと、楽しかったこと、苦労したこと、失敗したこと、その他いろいろ教育実習での出来事を語り合った。そのとき、「教師っていいなあ」とお互い頷きあったものだ。

夏の戸外は、うだるように暑い。さりとて冷房の効いた図書館の中も、暑さこそはないが、夏の気だるい倦怠感のあることにはかわりはない。今まで枕にしていた教員採用試験の問題集を開き直して、自分の不勉強ぶりに溜息をつきながら、今は

こう考えている。

教育実習というのは、教師の良い面ばかり見えて、もっと泥くさい面はなかなか見られないのかもしれない。それでも、教職を真剣に志望するようになったのは、教育実習の時からだ。教師になりたいという気持を理屈で考えても無意味である。実際に教壇にたって生徒に教えること、そこから教育というものの内に、いろんな発見や感動や疑問が見つかってくる。それが教育実習だっ

(英語)橋本文夫

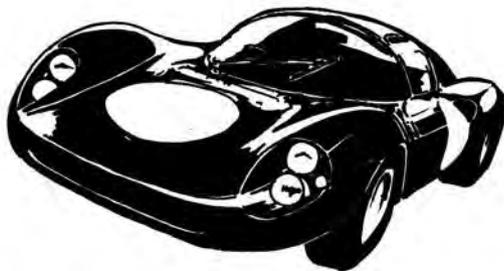
教育実習について何かを書こうと思い、実習についてふり返ってみると、当初の予想よりだいぶんしんどいものであったような気がします。多くうけもって5時間程度だろうし、今から発音を勉強しても手遅れだろうと精神的緊張感さえ保てず、図々しくも六月祭に顔を出して友人のバンザイ三唱によって見おくられたしだいです。この友人の心暖まる激励に答えよう。そう思って福山へ旅だちました。しかし、この気負と無教養とが少々悪影響を与えたようです。無教養さが暴露されることなく、かつ内容のある授業をしようとして、生徒とのコミュニケーションを忘れてしまいました。しだいに、これではいけないと感じはじめたのですが、最後まで教科書中心の教育実習となってしまうと、生徒と親しくなるようなこともありませんでした。これがひとつの心残りでありました。

うけもった時間数は8時間だったと思います。うけもつ時間数は多いほうが得をしたと思うべきでしょう。最初は指導していただいた先生の指導方法をまねて授業をするわけですが、50分という短い時間をうまく使えないままあっという間に数回は終わってしまうものです。そして、回を重ねるにつれてしだいに時間に対する感覚がづ

た。先日、地理を指導された先生から、実習生の授業に対する反省や感想を添えた御手紙をいただいた。その中にこんな文面があった。「教師にとって、一度も授業の失敗というのは許されない筈なのです。なぜなら、相手の生徒は前進し続ける者であって、価値のない授業を与えられるべきではないからです。」まったくその通りで、自分の授業を思い起こせば、今さらながら恥かしくなつて、赤面してしまふ。

かめるようになり、生徒の質問も冷静に聞けるようになるし、自分の話している内容についてもチェックしながら進めるような余裕が生まれてくるからです。教案を書くことに関しては、私がついた先生が細かいことを気にしない先生であったのでほとんど苦労はしませんでした。後から思うことは、授業が終わった後に教案と自分の実際の授業を比較し反省することが必要だったと思います。そういう事は全然しないで書きっぱなしで終わってしまいました。教授方法は指導していただいた先生の方法をまねしたので、やはりこれにもそれほど苦労はしませんでした。

すると、何がしんどかったのか。それは、教科書の内容についてすべて理解していないと不安であるという気持ちだが、毎晩おそくまで予習にかりたてた点でありました。教科書はあらかじめ購入するわけですから何年生をうけもち、どの部分を教えるのかということがわかればもっと楽になったでしょう。ともあれ寝不足の2週間でした。福山で旅館に集団で泊まり、合宿のような形態で行われる総科の実習方法については、いまだに私の意見は整理されていませんので、何か書こうと思ったのですが今回は以上にて私の感想といたします。



(理科) 広瀬浩一

旅行マニアの僕としては、2週間も違った土地へ行くのは、何となく心楽しく、ほとんど不安などなかったけれど、実習の以前から実習の場面などを想像してひとり芝居をすることが多かった。

〈裏切りには気をつけろ〉実習となると、いつもの旅行の調子で行くわけにもいかない。得意のジーンズもゾウリもだめ、長髪もどうかな……などと考え出すと、今度はなんかややこしい気分になってしまう。我々理科実習生は、制服として白衣を着用しようということにしていたのに、初日にして、ネクタイ族に裏切られてしまった。(今にして思えば、初日の対面式で、白衣が9人も並ばなくて良かったという感じ……)

〈附属の生徒は良い子ばかりで安心〉スケバンにからまれて血まみれにされるのもそう珍しくない御時世だけに、生徒の質(決して学力を意味するものではない)が気になるころだが、附属の生徒は良かった。こんな学校の教師になれば最高だろう。

〈ギャグに頼るな〉授業をやるからには、生徒に受けてほしいというのが人情で、指導案の中に、どこでギャグを出すなどと書き込んだりして教壇へ。ところが、受けるはずのギャグがまったく受けない。途端に頭に血が上って前後不覚に……。絶対にギャグには頼るなというのが親友の弁。

〈「教える者」は必死である〉人にもものを教えるようにすると、どれだけ苦勞しなければならぬかということ、今さら言うまでもないけれど、授業50分の短かさ、あっけなさには驚いた。僕も予想外の生徒の質問で、あっと言う間に時間切れとなってしまった。生徒にとって長い授業でも、先生は必死なんだなあと思うことしきり。しかし大学にもどって授業に出ると、その長いこと長いこと……。

〈実習は自分の教育哲学を試すチャンス〉だいたい、今の教育というのは、個々の科目を見る限り、それが何のために行われているのか、非常に不明確であるように思う。例えば歴史の授業を見ると、古代から始めて、現代へたどり着く前に時間切れになる。結局、現代を知るための歴史が、

単なる暗記を主とした知識のみに終始する。このようなことは、僕がずっと以前からもっていた不満であって、地学においても、絶対に教科書通りにはやるまいという方針で臨んだ。僕の場合、「地表の歴史」を2時間やったわけだが、常に人間を中心において、いろいろな物の考え方を話してみたいつもりである。授業が終わってから、生徒が「先生の授業は良かったヨ」と言ってくれたときは、星飛雄馬のごとくに感激してしまった。地理を教えた友人も、自分の考えを前面に押し出して授業をしていたが、生徒にも好評で痛快だった。まあ、思ったような授業をさせてもらえて、「私は幸せでした」。

〈環境科学は「総合理科」の柱〉附属では、総合理科の授業が実験的に行われていたが、その授業を参観した限りでは、どうも論点不明確で分りにくい。ほんとうに環境科学を意識して勉強してきた者ならば、これからの理科教育の救世主になり得るだろう。環境の皆さん、ガンバッて下さい。

〈総合科学部は何かと不利〉今回の実習で最もムゴかったことは、ホームルームに配属されなかったことであろう。原因は、福山分校の学生で定員オーバーになってしまったかららしい。実習に行くと、生徒と授業でしか接することができないとは、あんまりだ。恨みごとのひとつも言いたくなるよ。

〈関係者の方々に感謝〉非常に不利な立場にある学部であるにもかかわらず、至れり尽くせりの準備をしていただいて感謝の念にたえません。実習の準備だと、友人の髪をハサミだけでものものみにトラにして下さった地域環境研究室の安田先生。附属からわざわざ地学の範囲を教えにきて下さった池田先生、実にみごとに宿の割当てをして下さった学務の寺脇さん……。皆様には、紙面を借りまして御礼申し上げます。

後輩の皆様も、どうか、学部に対する誇りと情熱をもって、これから先ガンバっていただきたく思います。それでは、皆様方の前途に御多幸あれとお祈りしつつ、このへんで失礼させていただきます。

(国語) 飯田佳子

教師になろうと決めたのは、確か今から一年半くらい前だったと思う。この一年半、その決心だけはあらゆる方面からうちかためられた(つもりだった)が、それを意識しての勉強はほとんどしなかった。幸いにして、実習期間は2週間と短いので、なんとか気力で補ったが、教師として50分の授業を作っていく難しさはつくづく感じた。

文学作品が教材だったので、まずは文学史、作家の説明からと、自己紹介もそこそこにノートと教科書ばかり睨んでやった第1回目の授業。私は夢中だったから、あっという間の50分だったが、生徒たちはさぞ退屈したろうと思う。自分が高校の時、文学史なんて果して好きだったか。新しい教材に入る時、文学史から始めると、たいいていの生徒はやる気をなくすという。

「作者の死生観を読み取り、生・死の問題を自分の問題として把える。」という「立派」な単元目標に向かって教材(「城の崎にて」)にがっぷり組みついていかせるために、考えられる導入は、ひとつに、巨視的な問題意識を喚起させることだという。今までに、誰か、何かの死に遭遇したことがあるか。その時何を思ったか、等。要するに心構えである。

また、技術的なこととして、まず教師である自分に注目させるのも重要である。若い、珍しい——新鮮な魅力をもった(この点に関しては教生の特権である。)教育実習生に対する生徒の興味は、表面上はどうあれ、かなり強い。自己紹介はたっぷり余裕を持ってやった方がよい。それを通して生徒は教師を評価し、授業に対する心構えをしていく。教師は教壇という舞台上に立って50分間演じるのである。何しろ90の目に、全ゆる角度から見られているのだから。

では、教材にがっぷりくみついていくとは、どういうことなのだろうか。やはり基本として、教材から離れないことだと思う。「虎斑の大きな太ったはち」がすずめ蜂であることは一つの発見であるが、それを知ってか知らずか、敢えて「虎斑の大きな太ったはち」と表現したことは、死の寂しさ、静かさを表わすのに大きな効果を持つ。私は「すずめ蜂」言わせて、いらぬ話までして、興味を引こうとしたのだが、その時は生徒を引きつけ

たとしても、全体的には散漫な授業になったような気がする。かといって、教材のひとつひとつのことばに拘りすぎると、思わぬ失敗をする。

「寂しい考えだった。しかしそれには静かない気持ちがある。」という文章の「それ」は何をさすかという質問に対しての答えが、「寂しい考え」ではなく、「寂しいことを考えること」だという生徒がいた。内容ではなく、動作にあるという彼の主張に対し、他の文例を出すなどしているうちに泥試合のようになり、教室の後ろから先生が軌道修正された時は授業の半分程過ぎていた。(しかし皮肉なことにこの大失敗の授業が生徒にいちばん好評であった)。

文章から離れず、しかも見通しを失わず生徒をひきつけていく。どんな質問が出てもたじろがない。私には永久にそんな授業はできそうにない気がするが、それに一歩でも近づくために二つは努力できることがある。ひとつは徹底的な教材研究をすること。もうひとつは単発的な質問ではなく、よく吟味された質問、すなわち答えに対し、更にもう一歩つっこんでいける質問を考えることである。

こうして2週間の教育実習——5時間の授業と反省会——を終えて、私はやっと国語教育とはという問題にたどりついた。今頃、という気がしないでもないが、ひとつの教材にとりくみ、指導案を書き、授業を初めてしてみて、「私は国語教育として、この教材をどのように教えればよいのだろうか。」と思ったのである。敗戦に至るまで、日本にはすべての行動規範として教育勅語があった。そしてそれは文章の規範でもあった。「一旦緩急アレハ……」という文章を小学生までが暗唱させられたのは恐ろしいの一言に尽きるが、幸い今はない。日本国憲法前文を暗唱させてもいいと思うが、それもやっていないようだ。それに加えて今は多くの活字・ことばが氾濫している。雑誌だけでも月に何十冊出版されるであろうか。それらの活字の氾濫の中から何を選び、生きる糧とするのか。そのためにどういう能力が必要か。国語教育を考えるにあたってこれがひとつの中心的課題になるだろう。私自身、その能力を養わねば、あらゆる面を通じて。